

感動

昌平高等学校二年（埼玉県）

小山 舞桜

茶室に入った途端、抹茶の上品な香りが鼻をかすめる。目の前には緑色の畳が敷き詰められており、いつものフロアリングとは違っていてまるで異空間に来たかのようだ。だが不思議と心は落ち着いている。

畳に座るとお菓子がもてなされた。花形で桃色の和菓子が、なんともかわいらしい印象を受ける。何がモチーフになっているのだろうか。目線を上げると花入に美しい花が生けてある。見たことがないが、何という名前なのだろう。床には掛け軸があるが、文字が崩されており何と書いてあるのか読むことができない。―後で先生に聞いてみよう。点前座の釜からはかすかに湯気が立っている。そういえば、今日から風炉のお点前だと先生がおっしゃっていた。季節で区別されているのは何か理由があるのだろうか。―。様々なことに思いを馳せるうち、私は一つの疑問を抱いた。いつから私は茶道にこんなに興味をもち知りたいと思いつ

めたのだろうか。―ああ、きっとあの日だ。

あの日、母にお茶を出してほしいと言われ、お茶を点てた。と言っても、家に茶道の道具なんて揃っているわけもなく、ただ茶筌で泡立てて出しただけである。しかし母はとても感動し、私を褒めてくれた。正直作法もうろ覚えで何も母に教えることができなかったの、なんでそんなに感動しているのかが分からなかった。母にこれを問うと、「あなたが私のために点ててくれた。コーヒーとは全然違う。沢山の工程を通して私のために点ててくれて、心づかいを飲んでいるようだよ」と返ってきた。なるほど、仕事人の母はよく温めたインスタントコーヒーを電子レンジに忘れる。誰かが自分のために何かをしてくれる、というのは母にとっても嬉しいことらしい。まさに「わび」―茶道の美である。

中々気付けなかったが、私は母に褒められたことが嬉しくて、もっと感動してほしくて無意識に茶道を知ろうとしていたのだろう。

改めて茶道を見ると様々な発見がある。一つ一つの所作には流れがあり、それに沿って無駄がないこと。花や掛け軸には意味があり、お釜の位置で季節がわかる。すべてのことは相手への気持ちとなって表れている。

それからというものお稽古の時間が楽しくなった。茶道の奥は深く、様々なことを知っていくうちに私はどんどん

茶道の魅力に気付いていった。茶道の美意識にはただただ感動するばかりである。

私が今思うのは、母やこれから出会う多くの人々に茶道を通して感動を与えたいということだ。現代、日々の生活は目まぐるしく変わっていく。ひと息をついて受け取る最高のおもてなしの心は、安らぎ、温かみ、そして感動をもたらずのではないだろうか。そして、もっと茶道を究めさらなる魅力を発見していきたい。